

学位論文題名

モダリティ辞「ノダ」の研究
ー認識機能と伝達機能の階層的分析ー

学位論文内容の要旨

本研究は、日本語の文末に用いられる「ノダ」を一つのモダリティ表示形式と捉え、この意味機能を明らかにすることを目的としたものである。「ノダ」を一つのモダリティ辞と見なし、そこに2つの構文階層にまたがる機能が生じると主張している。論文は180頁ほどの本文(400字詰め原稿用紙に換算して約540枚)からなり、全体として8章で構成されている。以下、各章ごとの内容を要約して、最後に全体の趣旨をまとめる。

第一章では、「ノダ」について先行研究など知見として確立していることを整理している。その上で本研究が「ノダ」の機能に着目した分析であり、その本質的な意味機能、及び語用論的派生などを論じることが述べられる。「ノダ」は、伝統的には準体助詞の「の」と叙述の助動詞「だ」の複合による複合助動詞であるという認識が出発点になっていたこともあり、連体化と陳述という2つの機能の重力から自由にならないままの研究が多かった。本研究はそれをモダリティ助動詞から一歩進めて、機能を重視したモダリティ辞と定めるところから研究を始めている。

第二章では、日本語モダリティ論における「ノダ」の扱いについてまとめ、現代日本語研究の中で「モダリティ」がいかに理解され、その中で「ノダ」がいかに位置づけられているかについて整理している。日本語学における主流の考えでは、モダリティは、話者による事態認識を表すものと、発話における伝達態度を表すものに二分されている。それらはときに、命題目当てと聞き手目当てなど、異なる用語をあてることもあるが、おおむね2対立で説明する考え方は、文の述部を階層化して捉える考え方とも重なり合うことから代表的なモダリティ観になっているといえることができる。しかし、この2階層モダリティでは、「ノダ」はいずれか一方のみに単純に所属すると記述することはできないと本論文では主張し、その点について論証をおこなっている。さらに、この問題を解決できる枠組みを確立させるために、モダリティ2階層の特性と「ノダ」との関係について詳細に論じる必要があるとしている。

第三章は、予備的議論として、本論文におけるモダリティの扱いを明確にするために、モダリティの本質を論じ、その機能を文構造・発話解釈等との関わりでどう位置づけるかについて、枠組みの再構成を試みている。その上で、先行研究を再検証して、モダリティに2つの階層が設けられること、伝達態度モダリティが事態認識モダリティからの派生し

た意味機能と捉えられるとする。

第四章では、「ノダ」の事態認識機能を論じる。「ノダ」を伴う文と「ノダ」を伴わない文の事態叙述について話者の認識がどのように異なるのかを分析し、①「ノダ」を伴うことで、述語の表す概念のみならず、「ノダ」に先行して叙述された内容全体に対する話者の判断が表されること、②提示される命題が焦点部を含む叙述内容であるという話者の判断が「ノダ」で標示されること、の2つの特性が認められる。このうち、後者は、「ノダ」による文の「属性叙述化」ということができる。

第五章では、他の事態認識モダリティ形式と「ノダ」の両方が現れる文を分析し、「ノダ」は、叙述内容とそれに付与された認識を含む、先行叙述の内容全体に対する話者の判断を表すと結論づけている。いわゆる命題めあてのモダリティと言われる用法に分類されるものであり、「ノダ」の基本的な機能に認識論的な(epistemic)な用法があることを認めることができるとして、詳細な記述を行っている。

第六章では、「ノダ」の伝達態度モダリティについて考察し、事態認識機能を持つ「ノダ」が、実際の伝達が行われる発話の段階で用いられることにより、事態認識モダリティとは異なるモダリティ機能が、伝達に関わるものとして派生されると論じた。「ノダ」の表す伝達態度モダリティとしては、聞き手が提示された叙述内容から一定の解釈を引き出すことを求める作用を認め、それに関連して必要な発話上の行為、あるいは発話外の行為の必要性を計算する段階に展開すると考えた。「ノダ」によって、聞き手への配慮、告白、伝達内容に対する正当性の主張、行為指示など、多様な効果とされてきたものもこの説明の射程に含まれると論じている。

第七章では、「ノカ」疑問文を取り上げ、「ノカ」と「ノダ」の意味特徴で共有されるもの、「ノカ」による事態認識モダリティを分析した。「ノカ」も事態認識機能と伝達態度機能を持つと論じ、それが「ノダ」と一定の平行性を有すると考えた。

本論文では、「ノダ」の持つ本質的な意味としての事態認識モダリティ機能と、これから派生した機能として伝達態度モダリティ機能を主張したものであり、前者から後者への機能転換が徐々に生じると考えるものである。これは、発話における「ノダ」の機能として説明や関連づけが積極的に記述され、認識的意味については周辺的な扱いをしてきた、従前の研究と異なる点である。また、事態の叙述段階において表示される意味と、聞き手への伝達段階において発揮される機能を明確に分けて、モダリティというカテゴリ自体を再構成することで「ノダ」が表す多様な意味を階層に即して整理している。

命題を対象とする事態認識に関するモダリティは命題についての話者の主観(subjective)な表示領域と考えることができ、聞き手を対象とする伝達態度に関するモダリティは話し手の主観と聞き手の主観をつなぐ間主観的(intersubjective)な表示領域と考えることができるが、本論文の分析は、主観から間主観へと文法化が拡張して行く文法化理論と軌を一にする考え方でもあり、一般言語学や言語類型論に寄与する成果たりえりと評価できる。

(以上)

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 加 藤 重 広
副 査 教 授 小 野 芳 彦
教 授 高 橋 英 光

学 位 論 文 題 名

モダリティ辞「ノダ」の研究 －認識機能と伝達機能の階層的分析－

本論文は、日本語のモダリティに関わる複合辞「ノダ」について、記述文法を中心とする日本語学の成果を踏まえ、言語学の諸知見を活用しながら、統語語用論的な分析をおこなった研究である。

本論文は、180 ページほどの 8 章構成の理論的分析の論文であり、平成 23 年 11 月 30 日に提出され、同年 12 月 16 日に審査委員会が発足し、その後、平成 24 年 1 月 19 日の口頭試問とその前後に 5 回に渡る審査委員会を開催して、委員全員が一致して学位を授与するに相応のものと認め、文学研究科教授会にて 2 月 3 日に報告し、2 月 20 日の研究科教授会の投票で学位授与が認められたものである。

「ノダ文」は、日本語学の中で多くの関心を集める現象で、関連する多数の論考が既に存在しており、文法論と語用論を横断するテーマであることから、一見すると単純な複合助動詞の問題のように見えるものの、実に多層的で複雑な課題である。加えて、現時点において正攻法の研究とするには、関連するモダリティ論の研究を広く理解することがまず論考に先んじて必要となり、しかも、それらの研究は、厩大で、かつ、最新の成果が続々と発表されるなど研究の最先端に常に意を用いなければならない状況があり、端的に言って、研究課題としてはかなりハードルが高いものになっている。本論文は、日本語学における記述文法の成果をよく吟味して再構成し、近年急速に進んでいるモダリティ研究に関わる言語学的知見もよく咀嚼した上で、「ノダ」を文構造論やモダリティ階層論として分析することを基本的な方向性としているが、上に述べたような過酷な状況において一定以上

の成功を収めた研究であり、高く評価されるものである。

本論文の最大の成果は、従来の階層的モダリティ論を踏まえて、認識に関わるモダリティの階層における機能と、伝達に関わるモダリティの階層における機能とに、「ノダ」の機能を分けて記述できることを示し、2階層にまたがるモダリティ辞という位置づけに理論的実質を与えた点にある。2つの階層における機能の分化は、話者自身の認識に関わる主観(subjectivity)の層から聞き手への働きかけを含む、間主観(inter-subjectivity)の層へと派生していく、機能拡張として説明しており、従来さまざまな形で指摘されてきた現象や分析とうまく整合しつつ、より高い説明力を持つと認めることができる。それはたとえば、文法化(grammaticalization)の一般的方向性と合致する記述となり、その変化プロセスにおける語用論的機能、統語的な意味解釈のほかにも形態論的な特性などについて、言語学理論へのフィードバックすることが可能な知見となっている。

とはいえ、なんら問題点を含まないわけではなく、認識から伝達（主観から間主観）への派生について、その連続性や段階性について十分に論じていないことや、両者の階層の設定にもっと掘り下げるべき論点が多少残っていること、いくつかの用語の定義や用法について精密さを欠く点など、今後改善すべき余地はある。しかし、その点を考慮しても、「ノダ」のモダリティ機能について新しい知見を含み、モダリティ研究を次なる段階に進める成果として重要な意義を有すると言えることができる。

また、本論文の知見は、日本語教育国際研究大会（2010年7月台北、2008年7月釜山）などの国際学会や日本語用論学会（2007年関西外国語大学）、日本認知言語学会（2008年9月名古屋大学）、日本語教育学会（2005年11月北海学園大学）などで発表され、また北海道大学国語国文学会『国語国文研究』139などの査読誌を含む学術雑誌等に6本の論文として発表されて既に相応の評価を受けている。これらの実績も踏まえ、現在研究成果が盛んに積み上げられている日本語モダリティ研究の分野において、新たに切り開かれるべき方向性を示した、確固たる研究成果であると評価される。

また、これらの成果は、今後日本語研究だけでなく、一般言語学・認知言語学・応用言語学（日本語教育）などに応用できるものであり、その点でも長期的に参観や引用がなされることが期待される。

（以上）